

冬ごめ便り

220号

秋版

2016年(平成28年)
9月11日発行

編集・印刷：
馬込便り編集グループ

<題字 故黒田浩子姉>

「お前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。」(エゼキエル 36:26)

しもじょう ひろあき
司祭 フランシス 下条 裕章

わたしの好きな詩に「ちびっ子どもがすき」(*)という一編があります。50年ほど前にフランスで活躍された、ミシェル・クオストというローマ・カトリック教会の司祭さんが書かれたその詩を紹介したいと思います。その書き出しはこうなっています。

「神さまはおっしゃる、わたしはちびっ子どもがすきだ、と

みんなもあんなになってほしい、と
ちびっ子どもになれないおとなは、だいきらいだ、と

わたしの国には子どもしかはいつてもらいたくない、と

そんなことは世のはじめから決定されていた、とおっしゃる。」

お察しの通り、マルコによる福音書10章「子供を祝福する」場面になんでよまれた作品です。そして続けて、

「子どもといっても、体の曲がったのやら、ふんずけられたのや しわのよったのや、白いひげのはえたのやら いろいろいるが、こどもにはかわりはない

その点では変更なしだ、もう決定している

子ども以外は天国にはいる余地はもうない。」

彼は、社会の中に生きる人びと、ことに労働者と呼ばれた人びととその暮らしを見つめ、身近な出来事を詩に描き、教会が彼らとともに生きるものとなるように祈り求め続けました。そしてこの詩では子どもという表現のなかで、わたしたちの内に宿る神の似姿、共に在るキリストの心を描き出そうとします。神の国にふさわしいものの姿、それは完成された美しさではなく、育ち盛りの不確かさの中にある。それはまた過ちを犯さない正しさではなく、過ちを見つめて正そうと努力を重

ねる姿の中にあるといえます。神の国にふさわしい者は、子どものように澄んだまなざし、生き生きとした目の輝きを持っていると、その詩は訴えます。輝きを宿す目、すなわち、いきいきとした好奇心をあなたは持ち続けていますか、と問うているのです。この好奇心=今を共に生きている人間や社会に向けて、心ひらかれていることが、とても大切なのです。

わたしたちは生きています。そして何らかのきっかけがあってキリスト信仰に触れ、教会に関わっています。もしかしたら、中には長く信仰生活を送っていても、心穏やかに安心して暮らせるような日が来ないと、嘆いていらっしゃる方があるかもしれません。でもそれは、もしかしたら本当は素敵なことかもしれません。もちろんキリスト者は、不安な生活や不幸を求めべきだと言っているわけではありません。そうではなくて、心騒がす波風が、好奇心から、わたしたちを取り巻く人や社会とのかかわりから生起するのだとするなら、それは不信仰の故ではなく、信仰による目、神の似姿による輝き、人びとに向けてひらかれた、生き生きとした心が備えられていることの「しるし」なのかもしれません。そして、平穏かどうか、安心安全でいられるかどうかに関わらず、健康な時も病気の時も、豊かな時も貧しい時も、幸いにも災いにもかかわらず、どんな時も神さまが共にいてくださる。この世を見つめ、関わり、愛してくださる神さまとともにあるということ喜びと感じ、日々の出来事に直面しつつ、神さまの前に子どものように心躍らせ驚くことができるわたしたちでありたいと願っています。 <3ページへ続く>



日本聖公会 大森聖アグネス教会 東京教区

牧師 司祭 フランシス 下条 裕章 (しもじょう ひろあき)

〒143-0025 東京都大田区南馬込1-58-8

Tel&Fax : 03-3771-3459

e-mail : st.agnes.omori@gmail.com

ホームページ : www.nskk.org/tokyo/church/oomori/



<巻頭言より>

先ほどの詩は次のように結ばれます。

「だけどかれらの目がどろんとしていることほど悲しいことはない
窓があいていても人気のない家のように
目が二つひらいていても光がない
わたしは悲しくなって戸口に立ち、寒さにふるえてノックする
わたしはその中にはいってみたい

(中略)

ハレルヤ、ハレルヤ、ちびっ子の老人どもよ
みんなあけろ、わたした、きみたちの主人だ、よみがえった永遠者だ
きみたちの幼心をよみがえらせよう、いそげ今だ
きみたちにもう一度美しい顔とつぶらな瞳をあげよう
わたしはちびっ子どもがすきなんだ、みんなそうなってほしいのだ。」

※「神に聴くすべを知っているなら」日本基督教団出版局（1972）より